

優秀映画鑑賞推進事業



いはらき プレイバック映画祭

～鈴木清順×岡本喜八～
今なお愛される昭和映画の二大鬼才

2026 1月6日(火) >> 1月9日(金)



1月6日(火)
10:30/15:00上映
悪太郎

1月7日(水)
10:30/15:00上映
けんかえれじい

1月8日(木)
10:30/15:00上映
独立愚連隊

1月9日(金)
10:30/15:00上映
日本のいちばん長い日

料金：500円 ※当日精算可

会場：茨木クリエイティブセンター・センターホール
〒567-0888 茨木市駅前四丁目6-16

【問合せ・ご予約】

TEL.072-625-3055
www.ibabun.jp

予約開始
11/6



【主催】公益財団法人茨木市文化振興財団／国立映画アーカイブ 【協力】株式会社オーエムシー
【特別協力】文化庁／一般社団法人日本映画製作者連盟／全国興行生活衛生同業組合連合会／松竹株式会社
東宝株式会社／東映株式会社／株式会社 KADOKAWA
【後援】茨木商工会議所／茨木市観光協会



1月6日(火) 10:30／15:00

悪太郎

1963年／日活／95分



〔スタッフ〕

原作 今東光

脚本 笠原良三

〔出演者〕

山内賢

和泉雅子

田代みどり

東恵美子

小園蓉子

今東光の自伝的な同名小説が原作。悪太郎と異名をつけられるほどの素行不良学生・紺野東吾は、新たに受け入れられた兵庫県豊岡の中学校でも気ままに振舞い、喧嘩に恋に青春を謳歌するが、突如として厳しい現実を突きつけられる…。大正浪漫三部作など奇抜な映像表現で知られる鈴木清順監督だが、本作では同じく大正時代を背景にしつつ、山内賢演じる東吾の豪放磊落さと、初々しい恋心を清々しく情緒豊かに描いている。東吾が思いを寄せる女性・恵美子进行するのは和泉雅子。和泉と山内は多くの作品で共演する一方、のちに歌手としてもデュエット曲「二人の銀座」が大ヒットした。美術は本作が最初の鈴木清順作品となった木村威夫。郡上八幡など各地のロケ撮影と、造りこまれたセットが白黒画面の中で融けあって、大正時代の地方都市の雰囲気を出している。

1月7日(水) 10:30／15:00

けんかえれじい

1966年／日活／86分



〔スタッフ〕

原作 鈴木隆

脚本 新藤兼人

〔出演者〕

高橋英樹

浅野順子

川津祐介

松尾嘉代

片岡光雄

昭和初期、岡山から会津若松に移り住んだ暴れ者の硬派学生が、喧嘩に明け暮れながらも成長してゆく様子を活写したおおらかな青春映画。若き高橋英樹が主人公を熱演しているが、爽やかなアクションや乾いたユーモアの中に、ふと恋愛感情を覚えた主人公を通して豊かな叙情性が表現されている。山本直純による硬軟のメリハリが効いた音楽も、主人公の揺れ動く心理を的確に表していると言えるだろう。監督の鈴木清順は、日活時代に「プログラム・ピクチャー」の中で独特のシャープな作風を完成させた。ラストシーン近くに、やがて2・26事件で処刑される国家主義者北一輝が登場し、戦争に突き進む日本の姿を暗示しているが、原作にはなかったこの設定は鈴木監督が発案したものだという。

監督 鈴木清順

プレイバック映画祭

監督 岡本喜八

1月8日(木) 10:30／15:00

独立愚連隊

1959年／東宝／108分



〔スタッフ〕

脚本 岡本喜八

〔出演者〕

佐藤允

雪村いづみ

鶴田浩二

三船敏郎

夏木陽介

上原美佐

成瀬巳喜男、マキノ雅弘らに師事した岡本喜八は、デビュー作『結婚のすべて』(1958)で斬新な娯楽映画の旗手として注目され、翌年『独立愚連隊』を世に送る。太平洋戦争末期の北支戦線を舞台に、独立愚連隊と称する前線の哨隊で命を絶った弟の死に不審を抱いた元軍曹が、従軍記者に扮して部隊に潜入、事件の背後に潜む上官の不正を暴き出す。シナリオ作家協会賞を受賞した自作の脚本をもとに、西部劇のエッセンスをパロディとして活かしながら、日本映画の伝統には見られない活劇調の戦争映画を作り上げた。終戦時に予備士官学校に籍を置いていた岡本の戦争に対する屈折した思いが、アクション映画の意匠から滲み出ている。バタ臭い魅力を放つ佐藤允を主役に、中丸忠雄、中谷一郎、ミッキー・カーチスら個性派俳優、鶴田浩二や三船敏郎が各々ユニークな役どころを演じ、痛快な娯楽作を盛り立てている。

1月9日(金) 10:30／15:00

日本のいちばん長い日

1967年／東宝／157分



〔スタッフ〕

原作 大宅壮一 編

脚本 橋本忍

〔出演者〕

三船敏郎

笠智衆

山村聰

宮口精二

戸浦宏宏

1945(昭和20)年8月14日正午、御前会議によるポツダム宣言受諾の決定から、翌日正午の天皇による玉音放送にいたるまでの一日を描き、「大宅壮一編」として出版された半藤一利のノンフィクションを原作に映画化。橋本忍の脚本を得て、岡本喜八監督がキャストをメリハリのある演出でさばき、日本映画史に1ページを画する大作に仕上げた。天皇による詔勅の文面が決定されるまでの前半は、陸相と海相とのやりとりに見られる緊迫した言葉のドラマを軸に展開され、後半は一転、終戦を阻止しようとする陸軍青年将校らによるクーデター計画を中心に、厚木航空隊、横浜警備隊の動きを絡めながら、怒涛のようなテンポによる活劇が繰り広げられる。天皇が詔勅を録音するシーンと厚木基地での出撃場面のカットバックなど、戦中派である岡本のやるせない思いが細部にまでしみわたり、先の見えない国難に戸惑う者たちの心情が観る者の胸に迫ってくる。